

兄弟が一つになって

2021年9月19日

詩篇 133篇 134篇

序：都上りの歌（都エルサレムの神殿で礼拝をささげるために行く巡礼者たち）

120～134篇（15）

- 120 都から遠いメシク、ケダルを出立
- 121 都を間近に、都の山に目を上げる 天地の創造者のこれまでの守り
- 122 夜明けに共に誘い合って、都に上っていく
- 123 地上から、天上の御座を仰ぎのぞむ
- 124 今までの人生「もし主が私の味方でなかったら」と回顧する
- 125 主に信頼する者の堅固さを再確認
- 126 捕囚から解放、祖国にもどった喜び、祖国の変遷 忍耐と希望の種蒔き
- 127 都の街並に主の祝福を見る 子らは主の賜物 都の住人の家族への祝福
- 128 主を畏れる者の幸福（妻や子ら、囲む食卓、勤労の実）家族を懐かしむ
- 129 イスラエル民族の苦難の歴史、義なる神の復讐で恥をみる敵対者
- 130 そのさばきと恵みのゆえに、神を待ち望む
- 131 高ぶりや野望に支配されず、幼児が母とともにいるごとき安らぎ
- 132 しもベダビデの神殿建築の志、神の箱、彼の子孫メシヤ賛美
- 133 兄弟同胞の愛・一致の賛歌
- 134 最後の夜、神殿で働く主のしもべたち

133、134篇は都上りの旅の帰路に臨んでの歌

- I. 133篇 兄弟同胞、信仰を同じくする聖徒たちの親密な交わり
互いに知らなかった者たちが同じ目的のためにエルサレムで出会う
神礼拝が目的（民の交わりは後の結果）
唯一の神を愛し、共に神と互いを愛する仲間のありがたさ

背景：ダビデによるイスラエル統一・エルサレムを都とした
国家統一、神の民として一つとなった（かねてからの悲願）

諸部族が集まって、大祭司に導かれて、父祖アブラハムから出た同胞とし
神をあがめた
「なんという幸せ、なんという楽しさ」万感こみあげ、感無量

祝福： (1) 老大祭司アロンの頭に注がれた香油（身近）
たっぷりと
香しく
ひげを伝って、衣のえりにまで
流れしたたる

和やかに居並ぶ同胞・朋友に注がれる天の神の祝福

(2) シオンの山々に降りるヘルモンの露（雄大）
北部にそびえるヘルモン山の雪解け水
ヨルダン川を通して、死海に注ぐ
シオン（エルサレム）は死海の手前 約150キロ
乾燥した地を潤す

同胞・兄弟が睦まじく交わるしあわせ

都上りの歌として定着

あちらこちらから都に上って来た巡礼者が互いにこの歌を歌う
一つ兄弟・同胞として

主がそこに永遠のいのちの祝福を命じられた ⇒ 聖なる公同の教会
新約の神の民＝教会の信仰告白、聖徒の交わり

II. 134篇 宿願の都上り、神礼拝をして、これから帰路につく、都の最後の夜
夜は更けて深夜 見おさめに都を歩き巡る

(1) 巡礼者たちが見たもの

神殿のあかりの中に、神に仕えるしもべ
こんな夜半にも
翌朝の礼拝に備えて
敬虔に仕える祭司たち・レビ人たち（3+24名）
祭壇の火が消えないように
灯火の油を絶やさぬように
ささげもののパンを備え

夜明けとともに順調に1日が始められるように（秘訣は準備）

(2) 巡礼者たち ⇒ 主のしもべ達への呼びかけ

感謝を伝える
人の目につかない所、都全体が寝静まっている夜中の奉仕の尊さ
主をほめたたえよ（彼らの職務、ふさわしい）
主はまどろむことも眠ることもない（昼も夜も変わりなく）
仕えるしもべもまた同様

(3) 主のしもべたち ⇒ 巡礼者への祝福

天地を造られた主の守りがあるように
故郷に向かう家路につくあなたがたの旅を祝福されるように

都上りの歌のすがすがしく敬虔な締めくくり（互いに祝福しあう）

III. 結び

- ひ
- (1) 神の民の交わりの中心に擧げられるのは神
 - (2) 同じ主に贖われ、その主を信じる者の集いには、主の天来の祝福
 - (3) 同じ神の子ども、神の家族、神の御国の同胞・兄弟姉妹の交わりの幸いと
楽しさ
 - (4) それぞれの主にある奉仕に感謝し、互いに主にある祝福の呼応をする

キリストによって教会全体は成長し、愛のうちに建て上げられる
私たちは週の初めの日、毎週都上りを経験している
天からの恵みと新しい御霊の注ぎを受け、互いの1週の歩みを祝福し合い、
折り合って始める